

カラフルピーチ はちゃめちゃ^{じ けん ぽ}事件簿

カラフルピーチ／原作

^{よしおか}吉岡みつる／文

こよせ／絵



講談社 青い鳥文庫

目次

1 話

たい せつ

こわ

大切なツボを壊しちゃった!

P9

からびち^{ぜんいん}全員で共同生活^{きょうどうせいいかつ}をしているシェアハウス。
ある日、なおきりさんが花^{はな}を育てているツボ^{そだ}を壊^{こわ}しちゃった、じゃばばさんとゆあんくん。ふたりはそのことを隠^{かく}そうと、必死^{ひっし}。そんなときシェアハウスに“怪盗X”^{かいとうエックス}が現^{あらわ}れて——。

2 話

がっ こう

とある学校のバレンタイン

P81

きょう
今日はバレンタインデー。からびち男子組^{だん し ぐみ}はソワソワ。でも、のあさんとえとさんは“イケメン先輩”^{せんぱい}にチョコをあげるみたい。絶対^{ぜったい}にチョコ^{わた}を渡させまいと、あの手この手で妨害^{ぼうがい}する男子組。のあさんとえとさんはチョコ^{わた}を渡せるのか!?

3 話

いち にち けい さつ

一日警察やってみた!

P131

いちにちけいさつたいけん
一日警察体験^{いちにちけいさつたいけん}をすることになったじゃばばさんとゆあんくん。パトロールをしながら、バンドマンに騒音^{そうおん}を注意^{ちゅうい}したり、止まった噴水^{ふんすい}を直^{なお}したり、迷子^{まいこ}の犬^{いぬ}を探^{さが}したり……。そんな中、たっつんさんの5000万円^{ごまんえん}がなくなってしまったようで——。

はいどうも、みなさんこんにちは！

カラフルピーチのリーダー、じゃぱです！

“カラフルピーチ”は、ワクワクするような楽しいことや、いろんな新しいことにチャレンジするために集まった、仲良しグループなんだ。気軽に“からびち”って呼んでね！
今日は、俺たちが体験したおもしろい話を、みんなにしようと思うんだ！

たとえば……メンバーの大切なものをうつかり壊したら、大変なことになったちゃった話
や、バレンタインの学校で起きた大騒動。それから、俺たちが体験した、とんでもない大事件！

ふふん。何が起きたか、気になってしかたがないって？

それじゃあ、いますぐページをめくって！

俺たちと、ワクワクする冒険に出かけよう！

カラフルピーチ

しょう かい メンバー紹介



ちょっと抜けてるムードメーカー兼
頼れるリーダー

けつえきがた
血液型
エー
A
がた
型

せいざ
星座
やぎ
ざ
座

たんじょうび
誕生日
12/25

す
好きなこと みんなと一緒にいること

にがて
苦手なこと 歌うこと



じゃぱぱ

あま だい す
甘いもの大好き
しん ばいしやう
心配性ふわふわガール

けつえきがた
血液型
エー
A
がた
型

せいざ
星座
おとめ
ざ
座

たんじょうび
誕生日
9/18

す
好きなこと ひとといること

にがて
苦手なこと ホラー系

のあ

めんどくさがりだけど、誰よりも
好奇心旺盛なわんぱくボーイ

けつえきがた
血液型
ビー
B
がた
型

せいざ
星座
みずがめ
ざ
座

たんじょうび
誕生日
1/30

す
好きなこと パソコン

にがて
苦手なこと 建築



ゆあんくん



たっくん

ボケもツッコミもできる
ちゆう に びよう にん き もの
中二病の人気者

けつえきがた

血液型

ビー

B がた型

せいざ

星座

さそり

星座

たんじょうび

誕生日

10/25

す

好きなこと

ゲーム、昆虫観察、

想像で魔法を撃つこと

にがて

苦手なこと

朝起きること、

プレッシャーを感じることに

なに こと

何事にも全力で素直な

にん げん

キツネと人間のハーフ

けつえきがた

血液型

よる

夜 がた型

せいざ

星座

しし

星座

たんじょうび

誕生日

8/17

す

好きなこと

かたな

刀をながめること

にがて

苦手なこと

べんきよう

勉強



どめく

き そう てん が い はつ そう も めし
奇想天外な発想の持ち主、
ゆう かん
勇敢なみんなのお兄ちゃん

けつえきがた

血液型

エー

AよりのAO

(Bではない)

せいざ

星座

てんびん

星座

たんじょうび

誕生日

10/20

す

好きなこと

ホラー全般でーすきです

にがて

苦手なこと

わる こ きら
悪い子は嫌いです



なおきり

colorful peach

Eto

すぐに手がでる

楽観的サバサバガール

けつえきがた
血液型

Bがた型

せいざ
星座

てんびん
座

たんじょうび
誕生日

10/7



えと

す 好きなこと ゲーム、絵を描くこと、
うた 歌うこと、
いつかくせんきん 一攫千金!!!

にがて 苦手なこと 早寝早起き、スポーツ
（やるのは楽しいけれど得意ではない）

おふざけ大好きな、
からびちイチのロマンチスト

けつえきがた
血液型

Aがた型

せいざ
星座

いて
座

たんじょうび
誕生日

12/19



いち

す 好きなこと 絵を描くこと、
えいがかんしやう 映画鑑賞、ゲーム

にがて 苦手なこと 勉強

おしとやかで恥ずかしがり屋な
ひつじ王子

けつえきがた
血液型

Aがた型

せいざ
星座

しし
座

たんじょうび
誕生日

8/9

す 好きなこと ゲーム、旅行

にがて 苦手なこと 絵を描くこと



ヒロ

Hiro

Moku



もふ

★ ☆
おふざけも実は大好きな
からびちの頭脳

けつえきがた
血液型

まるがた

せいざ
星座

てんびん
座

たんじょうび
誕生日

10/14

す
好きなこと ナゾトキ、頭を使うこと
(パズルとか)

にがて
苦手なこと こわいものぜんぶ、
たたか
戦うゲーム (アクションとか)

だつりよくかん
脱力感のあるしゃべり方で
みんなの心を癒やす、
からびちのゆるキャラ

けつえきがた
血液型

オー
O 型

たんじょうび
誕生日

12/25

せいざ
星座

やぎ
座



シヴァ

す
好きなこと 辛い料理を食べること、ゲーム、
パンツをこたわること! (重要)

にがて
苦手なこと 歌うこと

1話

たい せつ

大切なツボを こわ 壊しちゃった!



とうじょうじんぶつ
登場人物



じゃばば



のあ



たっつん



ゆあんくん



シヴァ



どめく



うり



えと



ヒロ



なおきり



もふ

1

どうしよう！

大切なツボが！

こんにちは、じゃぱぱです！

トレードマークは、この真つ赤な髪と、恐竜印の服。好きな飲み物は、コーラ！ カラフルピーチのリーダーやってます！

ここは、宝くじの賞金で買った、大豪邸のシェアハウス。

俺たちは、みんな一緒にここで暮らしてるんだ。

さて。シェアハウスでの仕事も終わって、今日は一日遊び放題！
誰かヒマな人、いないかな？

……あ！ あそこのソファに座ってるの、ゆあんくんじゃない？

ゆあんくんは、プログラミングが得意な、＼からぴち＼のメンバー。

好奇心旺盛な性格で、ちよつとわんぱくなくところもあるけど……実はやさしくて、頼れる存在なんだ！

ソファから、ゆあんくんの黒髪と、赤色のメッシュがのぞいてる。

……ひひひ。後ろから驚かしちやおうつと。

「ワァッ！」

「わあーっ!! 何ッ!?」

ゆあんくんてば、マンガみたいにぴょんと飛び上がって驚いてる。イタズラ、大成功!

「ゆあんくん、何してるの?」

「なんだ、じゃばばか……ビックリした。今、テレビ見てたところ。」

「あれ、仕事は?」

シェアハウスでは、ひとりひとりに決まったお仕事——「役職」があるんだ。

俺の仕事? 俺はね、「ゴミ捨て係」! ……しよばいとか言うなよつ。

「いやあ、今日は、なーんも思いつかねえ☆」

ゆあんくんが、へへつと笑う。

「発明家」のゆあんくんは、いつも、俺たちのために便利な道具を作ってくれるんだけど

……あいにく、今日はスランプみたいだ。

「俺も、ちようどさつき仕事が終わって、ヒマなんだよね。今日は遊ぼうよ!」

「いいよ、いいよ！ 何して遊ぶ!?」

ゆあんくんは仕事を放り出して、大よろこびで乗ってきた。

「うーん……遊ぶって言ったら、まあ、鬼ごっことか？」

って言っても、ふたりで鬼ごっこじゃ、さすがに人数が少ないよな。

「誰か、他にヒマなやついないかな？」

あたりをキョロキョロ。すると……。

「あ、えとさん！」

オレンジ色のロングヘアをゆらして、えとさんが歩いてくる。

えとさんは、ノリが良くて、明るい性格の女の子。ペンキョーよりも、ゲームや遊ぶこ

とが大好き！ つてタイプ。

えとさんなら、絶対ヒマ！ だって、いつも俺らと遊んでるし！

「えとさん、ヒマでしょ！」

「遊ぶうよ！」

ゆあんくんとふたりで、えとさんを通せんぼ。でも……。



「あー。私、まだ洗濯残^{せんたくのこ}ってるんだよね……。」

よく見^みたら、両手^{りょうて}で洗濯物^{せんたくもの}を抱^{かか}えてる。そういえば、えとさんは「洗濯^{せんたく}」担当^{たんとう}だった。

「え〜!? 洗濯^{せんたく}は明日^{あした}にしない? 今日^{きょう}は鬼^{おに}ごっこしよーよ!」

「でも、持^もってきちゃったしなあ、洗濯物^{せんたくもの}。」

たしかに、両手^{りょうて}いっぱい洗濯物^{せんたくもの}を、今^{いま}から戻^{もど}しに行くのは面倒^{めんどう}くさそうだ。

「……しやうがない。行^いってよし。」

なぜか、ゆあんくんが先生^{せんせい}みたいに通行許可^{つうこうぎょか}を出す^だす。

「洗濯^{せんたく}、がんばってねー。」

えとさんと別^{わか}れたら、またふたりになっちゃった。

でも、今度^{こんど}は、外^{そと}に通^{つう}じる出入り口^{でいぐち}のほうに、なお兄^{にい}を見^みつけた。

「なお兄^{にい}〜〜!! 何^{なに}してんの〜?」

大声^{おおこえ}で呼^よんだら、なお兄^{にい}が笑顔^{えがお}でこちらを振り向^むいた。

「おお。花^{はな}に水^{みず}やりしてるんだ。」

彼は^{かれ}、なおきりさん。頼^{たよ}りになるし、アニキっぽいから、俺^{おれ}は「なお兄^{にい}」って呼^よんで

る。

ふざけるときは全力でふざけるタイプだけど、ホラーが得意だったり、いざというときは勇敢に行動してくれるんだ。

なお兄の役職は、栽培者。シェアハウスに咲いている植物を育てる係だよ。ちなみに、なお兄の大好きなお花は、ポピー。ここテストに出るぞ！

なお兄が水やりしていたツボの中には、大きくて真っ赤な花が咲いていた。お花と同じくらい葉っぱも大きくて、キレイに咲きほこってる。

「えっ、なにこれ？ 見たことないお花だな。めっちゃキレイだね！」

「愛情こめて育ててるからね。これだけキレイに咲くの、めずらしいよ！」

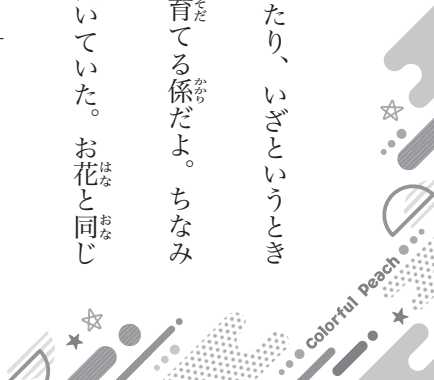
なお兄は得意げに胸を張る。

「このツボも、花にあうように選んでるから。」

そう言つて、なお兄はお花が植えてあるツボを指さした。

白地に、青い模様の入ったキレイなツボだ。

「じゃ、僕、水やり終わったから。」



立ち去ろうとするなお兄を、俺とゆあんくんは、あわてて止める。

「終わったんだったら遊ぼうよ！」

「いや。まだやることあるから。」

なお兄、キツパリ。

俺は、目をうるうるさせて、必死になお兄を引き留める。

「えゝ、いそがしい感じ？」

「いそがしいよ。」

くっ……。こうなったら、奥の手………！

「お花と俺、どっちが大事なの!？」

「花。」

ガ——ン。

あっけなく完敗した俺は、しょんぼり肩を落とす。

でも、なお兄は俺たちにやさしく言った。

「やることが終わった後なら、遊べるからね。」

「……うん。待ってる。」

俺とゆあんくんは素直にうなずいた。

「二連続で断られちゃったよお……。」

「うう……。」

くうー、花に負けたのか、俺たち……！

でも、そんなに大切なお花なら、今回は見逃してやるか……なんて、思っていたとき。

——ドオンツ！

廊下の奥から、物音がした。

「……今、なんか聞こえなかった？」

でも、ゆあんくんはきよとんとしている。

「いや？ ぜんぜん。」

あれ……？ 何かが壊れたような音が聞こえた気がしたけど……俺の気のせいかな。



「えとさんも、なお兄にいもいそがしいみたいだし、もう、ふたりで遊あそぶ？」

「そうだな！」

「よっしゃ！」

俺おれがツボの周まわりでふざけてジャンプした、その瞬しゅん間——。

ガシャ——ン!!

耳みみをつんざく、いやな音おとがした。

おそろおそろ、足元あしもとを見る。

「……!!」

床ゆかには、粉々こなこなになったツボと、くちやくちやにしおれた赤あかい花はなが落おちていた。
もしかして。もしかして……。

俺おれたち、なお兄にいの大切たいせつなツボを壊こわしちゃった——!?



2

お願い、たっつん!

サーツと血の気が引いて、心臓がバクバク鳴った。

ゆあんくんも、真っ青な顔をしている。

どうしよう。俺たち、なお兄の大切なツボを壊しちやつた——!!

「ゆ、ゆあんくん、どうする!? これ……なお兄に見つかったら、ヤバない?」

「うん……。お花、すつごいがんばつて育ててたもんね。」

お花を自慢していた、なお兄の笑顔を思い出すと、胸が痛むよ……。

これがなお兄にバレたら、絶対、すつつごく怒られる……!!

よし、こうなつたら……。

「いったん、隠すしかない!!」

ここにあったら、見つかるのは時間の問題だ。とりあえず人目につかないところに

……。

……つて、うわーッ! なお兄が、こっちに戻つてきた!!

「ゆあんくん、隠して！ 来てる、来てる！」

「ヤバイ、ヤバイ……！」

ゆあんくんが必死に腕を広げて事件現場を隠してるスキに、俺はなお兄の注意を引く。

「や、やあ☆」

やべ。不自然すぎるあいさつしちゃった……。

なお兄も、「どうも……。」って、不思議そうな顔してる。

「こ、こっち向いて話そう、なお兄！ えつと……今日は日差しがまぶしいからね！」

俺はさりげなくなお兄の背中側に回る。

だって、ちようどなお兄の視線の先に、割れたツボがあるんだもん!!

「いいか、なお兄……。俺の顔だけ見とけ。」

「うん……？ わかった。」

ちよつと苦しいけど……なんとか、ごまかせたみたい。

「ところで、なんでなお兄は戻ってきたの？」

「ああ……。庭のほうに用があつて。」



なお兄は、話しながら正面入り口へ向かっていった。
よかった。ツボとは別の方向だ。

「よしよし……じゃなかった。いつてらつしやうい！」
俺たちは引きつった笑顔でなお兄を見送ると、大きく息を吐いた。

「はあ~~~~……あつぶねえ……！」

なんとか、耐えた……。でも、バレたら、タダでは済まされないぞ。

きつと、お仕置きとして、なお兄が飼いならしてるハチたちに、身体をブスブス刺されるに違いない……！

「今のうちにツボを直して、似たような花を見つけてくれば、なんとかなるかもしれない

……！」

俺が言うと、ゆあんくんもうなずいた。

「うん。気づかれる前に、元に戻そう！」

けれど、ゆあんくんは、うーんと腕を組む。

「でも、割れたツボを元に戻すのって、かなり難しいよね……。」

俺はちよつと考えて、いいアイデアを思いついた。

「そうだ！ うちには、大工のたつつんがいる！」

「おい、天才かよ！」

ゆあんくんが、それだ！ というように、ぱつと顔をかがやかせた。

「よし！ たつつんに直してもらおう！」

*

この時間、きつと、たつつんは作業部屋にいるはずだ。

作業部屋は、二階。赤いカーペットの廊下を進むと、木製の両開きのドアが見えてきた。

コンコンコン。

せつかく俺がノックしたのに、返事も待たずに、ゆあんくんがドアを開けちゃった。工具を持って作業机に向かっていたたつつんが、おどろいた様子で振り向いた。



「どうしたの？」

金髪きんぱつに、左目ひだりめには眼帯がんたい。ちよつといかつい見た目みめだけど、やさしくてオモロい関西人かんさいじんのたつっん。

いつもは一緒いっしょにふざけて遊あそんでるけど、今日は超マジメな話はなしだ。

俺おれは、せいっぱい神妙しんみょうな顔かおを作つくって、声こえをひそめる。

「マジで、取扱注意とりあつかいちゅういの案件あんけんだから、誰だれにも言いわないでほしい。約束やくそくしてくれる？」

「おうおう。わかった。」

「じゃあ、『誰だれにも言いわないです。』って、言いって？」

「……え？」

たつっんは、ヤバい空気くうきを察さつしたらしく、一歩後あとずさる。

情報じょうほうが漏もれると、俺おれらね……“抹消まつしょう”されるから。」

ゆあんくんが、じりじりとたつっんを壁際かべぎわに追おい詰つまめる。

「え、どうということ……？」

「存在そんざいを消けされるんだよ。漏もれると……抹まつ、消しょう。」

「消される……!？」

曇みかけるゆあんくんに、ついに、たつつんも観念したみたい。

「はい……。『誰にも言いません』。』」

よし。これで、たつつんも『共犯』だ。

「これなんだけどき……。」

俺は、割れたツボの欠片をポケットから取り出して、たつつんに見せた。

「うわ……。なんやこれ？」

「これ、壊れたツボなんだけど……。直せないかなって。」

たつつんは顔をしかめて、ツボの欠片をじっくり観察してから言った。

「……こんな粉々やったら、無理やろ。」

うーん。やっぱり、そうだよね……。

「これ……。すげえ衝撃入ってるよ。ちよつとやさつとじや、こんなことならんで。」

「そ、そうなのかなあ？ わかんないね〜？」

俺は目をそらして、しらばつくれる。





「やっぱり、たつつんでも難しいか……。」

「なんかごめんなあ、役に立てへんくて。」

「いやいや！　ありがとう。」

たつつんにお礼を言っれいて、部屋を出る前まえに、もう一度釘を刺さす。

「絶対に言いっちゃダメだからね。」と、俺おれ。

「抹消まつしょうだよ。」と、ゆあんくん。

たつつんは、不安ふあんそうな顔かおで「抹消……？」とつぶやいた。

*

うーん。たつつんでも直なおせないとなると、ツボを元もとどおりにするのは至難しなんの業わざだぞ。

「ツボもだけど……お花はなも用意よういしないとダメじゃない？」

ふと、ゆあんくんが言いう。

そうだった！　お花はなも探さがさなきゃいけないんだった。



でも、なんていう名前のお花なんだろ？

「書齋に図鑑とかあるだろうし、もふくんならなんか知ってるかも。」

ゆあんくん、ナイスアイデア！

もふくんは、＼からぴち＼イチの頭脳派な男の子。

博識だし、ナゾトキも得意だけど、実はおふぎけも大好き。いつもおもしろい話をしてくれるんだ！

「もふくんのところ、行ってみよう！」

もふくんはこの時間、だいたいいつも、二階の書齋にいる。

さつそく向かおうとしていると……。

「あれ？ ここにあったお花、どこいったんだろう？」

このゆるふわな声は……のあさん！

のあさんは、かわいらしい声とピンク色の髪の子。

「掃除係」としていつもシェアハウスの掃除をしてるから、物の配置の変化に気づい

ちやっただ……！

「えゝ、かわいかったのに……。」

のあさんは、お花^{はな}がなくなった場所^{ばしょ}を見て首^{くび}をかしげている。

……あ、いやな予感^{よかん}がする。

「なおきりさ——ん!!」

「待^まて待^まて待^まて待^まて!!」

俺^{おれ}たちは慌^{あわ}ててのあさんの手^てを引^ひつ張^ばり、急^{いそ}いで人目^{ひとめ}につかないところへ連^つれていく。

「なにしてんの! 危^{あぶ}ない危^{あぶ}ない……。」

「えっ? 何^{なに}が危^{あぶ}ないんですか?」

のあさんは、目^めをぼちくり。

「あの、ツボが……。お花^{はな}、なかったですよね?」

あーあ。のあさん……。気^きづいちゃったみたいだね。

「見^みえたらな〜。」

「気^きづかないほうがいいこともあるんだよ……。」

俺^{おれ}とゆあんくん^{さゆう}に左右^{さゆう}から詰^つめ寄^よられて、のあさんはビクツと後^{あと}ずさる。



でも、バレちゃあしょうがない。

「……アレ、俺^{おれ}たち、割^わつちやつたんだよね……。」

「……えッ!? 割^わつたんですかア!?」

「……えッ! のあさん、声^{こえ}が大きいって!

「じゃあ、なおきりに言^いに行^いかないと……。」

「ダメだよ、ダメだよ!!」

「え? なんでなんで? だって、すぐに言^いったほうがよくないですか?」

それはあ、たしかにそうなんだけどお……。怒^{おこ}られるの、怖^{こわ}いじゃん……。

「ここは、内密^{ないみつ}にしときたいんだよね……。」

「でも、絶対^{ぜったい}気づきますって。」

食い下^さがるのあさんに、ゆあんくんが、ポケットから何^{なに}かを取り出^だして、手渡^{てわた}した。

「のあさん……これ。」

それは、のあさんの大^{だい}好き^すなチョコチップクッキー。

のあさんは、それをじつとながめて……。

「イヤ。」

首を横に振りながら、スツ……と、懷にしまった。
いや、もうんかい。

「……も、いつちよ！」

ゆあんくんが、さらにクツキーを手渡す。

「イヤ。」

「もいつちよ！ もいつちよ！ もいつちよ！」

五枚、十枚……ゆあんくんからのあさんに、どんどんクツキーが渡される。

「……これでどうだ！」

「んゝ……。」

のあさんは、チラリとゆあんくんを見て。

「足りないなあ。」

くつ、なんて食いしん坊なんだ！

すみません、残りは、後払いで許してください……。



「わかりました。じゃあ、言わないでおきます。」

のあさん、ようやく納得してくれたみたい。

「俺たち、なお兄が気づく前に、ツボとお花を用意しようと思うんだ。」

さらに、のあさんがこんな提案してくれた。

「お花の名前がわかったら、わたし、探しに行きますよ。」

「えっ、本当に!?」

俺には、のあさんが、女神様に見えるよ……!!

「俺たち、今からもふくんにお花の名前を聞きに行こうかなって思ってた。のあさんも、

ついてきてくれる？」

「わかりました!」

「ありがとう! ……あとで、ケーキ買ってあげるからね♪」

俺が耳打ちすると、のあさんは、ぱあっと瞳を輝かせてブンブンうなずいた。

心強い仲間が増えて、なんだかうまくいきそうな気がしてきた!

3 用心棒うり、参上!

書齋しよさいに向むかって歩あるき出だそうとして、俺おれはふと氣きがついた。

「……でも、ここから離はなれたら、また誰だれかが氣きづくかもしれないよね。」

「たしかに……。」

ゆあんくんと、のあさんがそろって言う。

となると、誰だれか、見張みはり役やくがいるな……。

こういうときは――。

「……用心棒ようじんぼう、呼よぶか？」

俺おれたちの豪邸ごうていシアハウスには、貴重きちゆうな書物しよもつや、高価こうかな調度品ちやうどひんなんかもいっぱいある。

だから、警備けいびを担当たんとうする用心棒ようじんぼうがいるんだ。

「用心棒ようじんぼう」に来てほしいときは、こうやって叫さけべばいい。

「大変たいへんだ! 事件じけんだ! 助たすけてくれ〜〜〜!」

すると――。

「どうしたあ～～!?」

叫びながら、猛スピードで廊下を駆けてくるのは、“用心棒”の、うりだ。

事件が起きたら、うりは真つ先に現場に駆けつける。今も、手には木製の剣をたずさえ、準備万端。

“用心棒”なんて役職をしてるけど、実はすつごくロマンチストだし、歌や絵も得意なんだよ!

「うりさん! ツボが――。」

「ちよ、ちよ、ちよ!!」

勢いよく暴露しかけたのあさんを、俺はあわてて止める。

言っちゃダメでしょ! うりには内緒で、見張つてもらわなきゃ。

「なんだ、なんだ?」

いぶかしがるうりに、俺は口笛を吹いてごまかしながら……。

「聞いてくれ！ 大事件なんだよ！」

「おう。なんだ!？」

……あ、ヤバい。事件の内容、考えてなかった。

「えつとお……。怪盗Xから、予告があつたんだよ！」

とつさに、口から出まかせを言った。

「予告!？」

「豪邸から、お宝を盗む……。つて！」

「なんだつて!？」

我ながら苦しいウソだけど……。うりは信じてくれたみたい。

「だから、ここらへんに、誰も近づかないように見張つてほしい。」

「まかせとけ！」

うりは、力強くうなずいた。

俺は、ダメ押しとばかりに続ける。

「怪盗Xは、誰かに変装してる可能性もあるから。……。特に、なお兄に変装する確率が





非常に高い！」

「なおきりさんに!？」

うりは、少し不思議そうな顔をしたけど、俺のウソには気づいていないみたいだ。

「仲間だからって、油断はできないからね! 誰も近づけないように、頼む!」

「おう!」

うりは、やる気満々だ。

うーん……前から思ってたけど、うりって、すぐだまされやすいんだよな。

“用心棒”としては、ちょっと心配になるけど、おかげでうまくいきそうだ。

これで、事件現場は、うりが見張っててくれるはず。

「……よし。じゃ、行こっか!」

俺たちは、もふくんのいる書斎へ!

*



二階^{かい}の廊下^{ろうか}のつきあたりにある、書齋^{しよさい}。

貴重な書物^{きちょうなしょぶつ}がたくさん置いてある、図書館^{としよかん}みたいな場所^{ばしよ}だ。

「研究員^{けんぎんいん}」の役職^{しやくしよく}をしているもふくんは、調べ物^{しらべもの}のために、この部屋^{へや}にすることが多いんだ。

ドアをノックしたら、「どうぞ。」って、もふくんの声^{こえ}がした。

「失礼^{しつれい}します。」

俺^{おれ}を先頭^{せんとう}に、部屋^{へや}に入る^{はい}。

「じゃつぴたちだね。どうしたの？」

もふくんが、メガネを押し上げて俺^{おれ}たちを見た。

ちなみに、「じゃつぴ」っていうのは、俺^{おれ}のあだ名^な。かわいいでしょ？

「ちよつと、調べてほしいお花^{はな}があつてさ。もふくんなら、何か^{なに}知らないかなうって。」

「ああ。調べれば見つかると思う^{おも}けど……。なんで、急に^{きゅう}そんなことを？」

ドキッ!!

「いやあ、あの……友達^{ともだち}の、お父さん^{とう}の……娘^{むすめ}の、知り合^{しあ}いがね！」

ゆあんくんが、とつさにごまかした。

「そうそう！ 大好きなんだよね、そのお花！」

俺も、そのウソに乗っかる。

「名前は知らないけど、プレゼントしたいらしいんですよ！」

のあさん、ナイスフォロー！

俺も、うまく話をあわせとかなきゃ。

「そうそう。お父さんの友達の子にね！」

「えっ、ちがうよ。友達のお父さんの、知り合いの、娘だよ！」

ゆあんくんが訂正すると、のあさんが「ちがうちがう！」と首を横に振る。

「友達のお父さんの娘の知り合い、じゃなかったですか？」

やべっ……テキストについたウソだから、設定忘れた。

「えーっと、お父さんの知り合いの娘の……？」

「えっ、お父さん？」

「あ、ちがった。お父さんの、お父さんの……。」



あれれ、こんがらがってきたぞ……。

「ちよつと待つて！ お父さんのお父さんの友達のお父さんの娘のお父さんの……？」

ああ……、もふくんまで、目がぐるぐるしちやつてる。

「とにかく！ ちよつと遠い知り合いにね、お花が欲しいって人がいて。」

「ふーん……なんか、怪しいけど……。」

ギクツ！ もふくんは察しがいいから、バレないかヒヤヒヤするよ。

「まあいいや。そのお花について、知ってることがあつたら教えてよ。」

「あー……。赤くつて、葉っぱがめっちゃでかい……。」

記憶をたどつて、なお兄が育てていたお花を思い出す。

「ふむ……。ちよつと見てみようか。」

もふくんはそう言つて、本棚から分厚い大きな本を取り出した。

「赤くて、葉っぱが大きい……あー、たぶんこれじゃないかな？」

ペラペラ、と何枚かページをめくつたあと、もふくんが俺たちに本を手渡して見せてく

れた。

開ひらかれたページに載のっている写真しゃしんは、まさに、あの赤あかい花はな！

「あつ！ これこれこれ！ これだよね!?」

写真しゃしんを見て、ゆあんくんも、勢いきおいよくうなづく。

「えつとね、ポインセチアついていつて、このあたりの草原そうげんに生はえてるらしいよ。」

ポインセチア……はじめて聞きく名前なまえだ。

「今いまも咲さいてる?」

「うん。時期じきもね、ピッタリ!」

よかった! それなら、探さがしに行いける!

それにしても、「赤あかくて葉はっぱがでかい」って情報じょうほうだけで、一発いっぱつで見みつけ出しちゃうも

ふくん、すごすぎる。さすが頭脳派ずのうは!

すると……。

「あれ。なんか、この花はな、見覚みおぼえがある気きがするんだけど。……なお兄にいあたり、育そだてな
かった?」

……マズい。もふくんは、記憶力きおくりきもいいんだった。





「ふりん……そうだっけ？」

俺おれは、もふくんから目めをそらす。

「なお兄にいに聞きいてみたらわかるんじゃないや……。」

「あ……なお兄にいには迷惑めいわくかけたくないかな、はは！ ははは!!」

怪あやしまれる前まえに、そそくさと、出で入り口ぐちへ向むかう。

「もふくん、ありがとう！」

「うん。どういたしまして……？」

逃にげるように書斎しよさいを出でて、階段かいだんをかけ下おりた。

「あいつ、勘かんづきやがった……。抹消まつしよか？」

ゆあんくん、なんだか、どんどんワルになつてきてない？

「じゃあ、わたしはお花はなを探さがしてきますね。」

「うん！ 頼たのんだよ、のあさん！」

玄関げんかんから出でかけていくのあさんに手てを振ふる。これで、お花はなはなんとかかなりそうだ。

残のこるは、ツボだけ……。

でも、まずはお昼^{ひる}の時間^{じかん}だ。
みんなの集^{あつ}まるリビングに急^{いそ}がなきや！



4

怪盗X現る!?

リビングに行ったら、もうみんな、食卓に集まっていた。

「今日、ご飯なんやろなあ。お腹すいたあ。」

お、たつつの声が聞こえる。うり、えとさん、もふくんも、席に座って待っている。リビングには、すごく長い机があって、机をぐるっと囲むように、イスが並べられている。

ここで、その日シェアハウスにいるメンバーが一緒にご飯を食べるんだけど、今日はお出かけ中。シヴァさんは厨房で料理を作っていて、いないみたい。

この場にはいないメンバーのことも、ちょこつと紹介しておこうかな！

「どぬ」こと、どぬくさんは、キツネと人間のハーフ！ 長い髪の間からキツネの耳がぴよこんと出ていて、いつもサムライみたいな恰好をしてるんだ。

どぬは、シェアハウスの「調達員」。生活に必要なものを集めてくる係だ。今日も、材料を集めて行ってくれているみたい。

そして、もうひとりとはシヴァさん。

シヴァさんは、なんと、起きたらパンツをはいたカエルになっていた！ つていう、不思議なひと。＼からぴち＼のマスコットみたいな存在で、いつも俺らを楽しませてくれる、ムードメーカーなんだ。

カエルだけど、料理が得意で、シェアハウスの料理人＼をしてくれているんだよ。俺とゆあんくんも、食卓の自分の席に座る。

「ごっはん♪ ごっはん♪」

そこに、なお兄が鼻歌まじりにやってきた。

なんだか上機嫌だし、まだ、ツボのことには気づいてなさそう……。

すると、そこに。

「給食当番です。」

厨房から、本日の配膳係のヒロくんがやってきた。

ヒロくんは、ふわふわの羊にそっくりな服を着た、王子様みたいな男の子。ちよつと気弱で恥ずかしがり屋だけど、すぐがんびり屋さんなんだ。



そんなヒロくんが、昼食ちゆうしよくを配くばってくれる。

「はい、じゃばばさん！」

俺おれの前に、焼き魚やかなの定食ていしょくが置おかれる。

「おり！ 魚さかなだ！ 今日きょうは和食わしょくか。」

順番じゅんばんに、みんなにご飯はんを配くばっていたヒロくんが、首くびをかしげた。

「あれ？ のあさん、いない？」

ギクツ！

食たべることが大好きだいすなのあさんが、ご飯はんの時間じかんを忘わすれるなんて、ありえないことだ。

「ほ、ほんとだあ。どーしたんだろううね？」

俺おれは、内心ないしん、冷や汗ひあせをかきながら、みんなに話はなしを合あわせる。

「あれ？ でも、さつき、じゃつぴたちと一緒にいっしょにいなかった？」

ギクギクツ！！

もふくんの言葉ことばに、みんなの視線しせんが俺おれに集あつまる。

「そうだったけなあ？ 俺おれ、知らない！」

ごまかそうと、机つくえの上のお茶ちやをゴクゴク……。

「そういえば、ツボはどうなったん？」

ブ——ツ!!

ちよ、たつつんさんッ!? びっくりして、お茶ちやふき出しちゃったけど!?

「粉々こなごなになってたやつ、あったやん。」

「わー! わー! わ——!!」

ちよっと! 「誰だれにも言いいません」って、約束やくそくしたでしょ!?

シートと合図あいずすると、たつつんも思おもい出だしたように、口くちをつぐんだ。

「はは。なんでもないですよ、みなさん。お騒さわがせしちやってすいませんね……。」

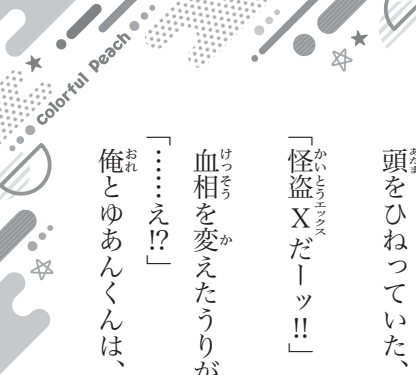
俺おれは、平静へいせいをよそおって笑わらう。

「なんでもない……?」

えとさんが、怪しあやんでいるような気きがするけど……うん。ギリ、セーフ。

ヒヤヒヤしながら、俺おれはあわててお昼ひるご飯はんをかきこんだ。





*

「ごちそうさまでしたーっ。」

昼食を^{ちゆうしょく}食べ終わると、俺は^{おれ}すぐにゆあんくん^{こえ}に声をかけた。

「やばいよ、ゆあんくん！ だんだん、みんな^き気づいてきた^き気がする……。」

「ほんとだよっ。早く^{はや}どうにかしないと……。」

でも、あの粉々^{こなこな}のツボを、どうやって元^{もと}どおりにしよう？

頭^{あたま}をひねっていた、そのとき。

「怪盗^{かいとう} X だーッ!!」

血相^{けつそう}を変^かえたうりが、リビングに飛^とびこんできた。

「……え!？」

俺^{おれ}とゆあんくんは、顔^{かお}を見^み合わせる。

怪盗X………？

そんな、まさか。だってあれは、俺がとつきについたウソなんだから。

「カドケシが盗まれた!!」

えっ………!?

「カドケシ」は、このシェアハウスの一階中央にある、謎のモニメントのこと。

とある文房具に形が似てるから、通称「カドケシ」。

でも、それが盗まれた………って、どういうこと!?

「来てくれ! とりあえず!」

うりの後について、廊下に出る。

カドケシの場所へ行くと……。

いつもどおり、そこにカドケシがあった。黒いガラスのショーケースの中に、白い立方体を積み上げたような、不思議な形のモニメントだ。

立方体も、ちゃんと八つ……あれっ!?

よく見ると、下のほうのガラスが割られていて、カドケシの一部がなくなってる!





「カドケシの“角”がない……!」

“カド”ケシなのに、一番大事なところ、なくなってるじゃん!

「いつ盗まれたかわかんないけど、今、確認したらなかったんだ!」

うりが真剣な顔で言うそばで、俺は小声でゆあんくんに言う。

「……本当に盗まれたよ。どういふこと!? 怪盗X……!」

ゆあんくんも、わけがわからないって顔で肩をすくめる。

「もしかしたら、もっと前から盗まれてたかもしれない。みんなも、怪盗Xに気をつけ

てくれよ。」

うりに言われ、みんなが、不安そうにうなずいた。

俺とゆあんくんは、なんだか妙な気持ちで顔を見合わせた。

……だって、「怪盗X」なんて、いるわけないんだ。

全部、俺のウソなのに……いったい、何が起きてるんだ!?

